

——雨の音が
聞こえる

ここは
どこだろう

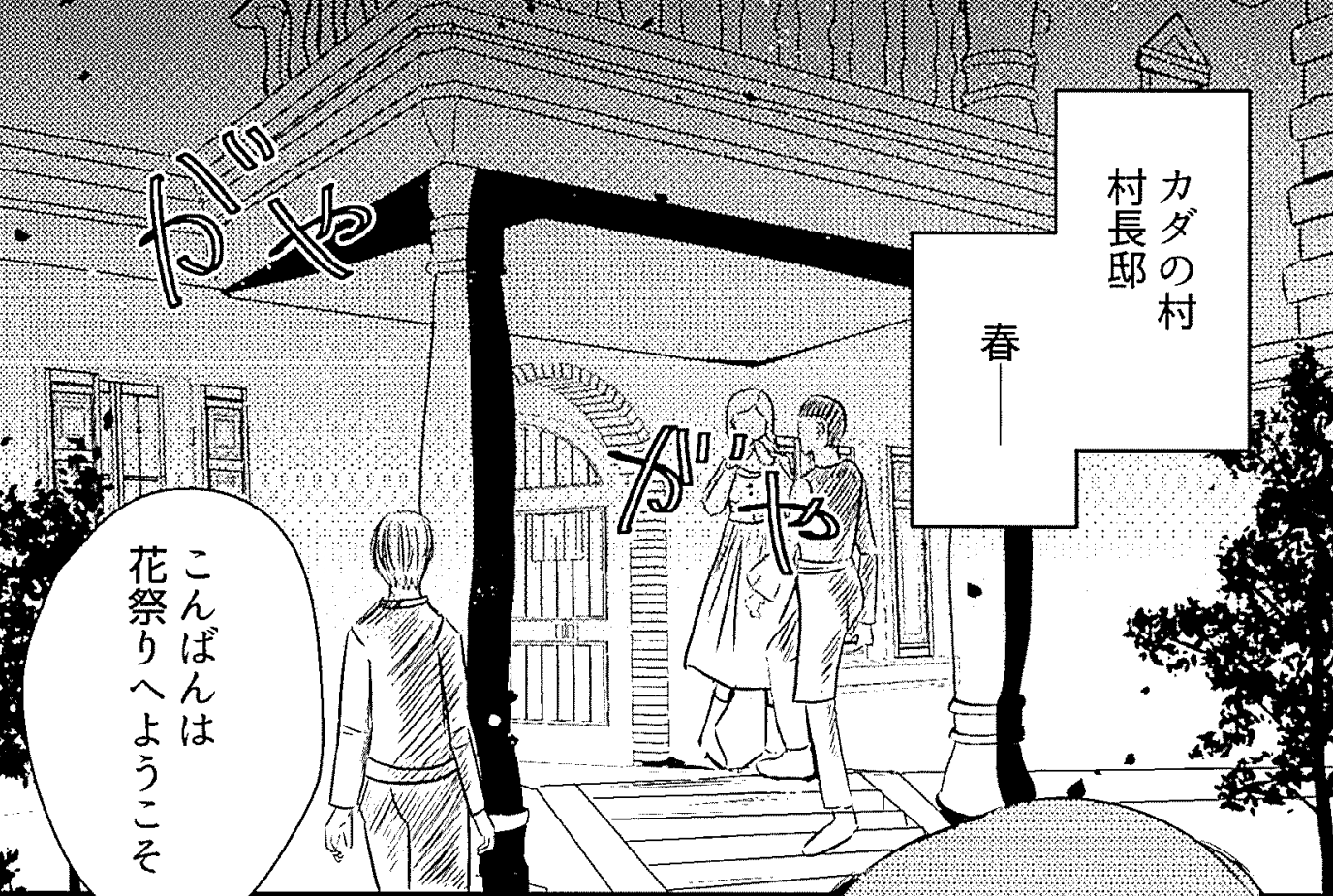
僕はどうして
ここにいるんだろう

——
ねえ

あんた
名前は？

あたしは
タニカって
いうのよ

僕は——



カダの村
村長邸

春

かた

こんばんは
花祭りへようこそ



アイシヤ!



ありがとうございます、
招待状を拝見します



アイシヤ!
今年の花祭り
すごいね〜!



イーナ

やほ



近くの村の人たち
だけじゃなくて

都の貴族さまたちも
来てるって!

※一般人からは離れたところにいる



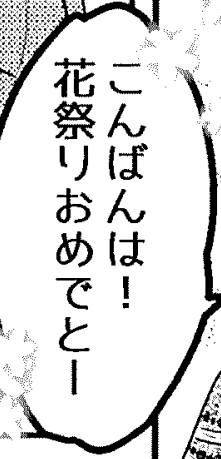
アイシヤ!
イーナ!

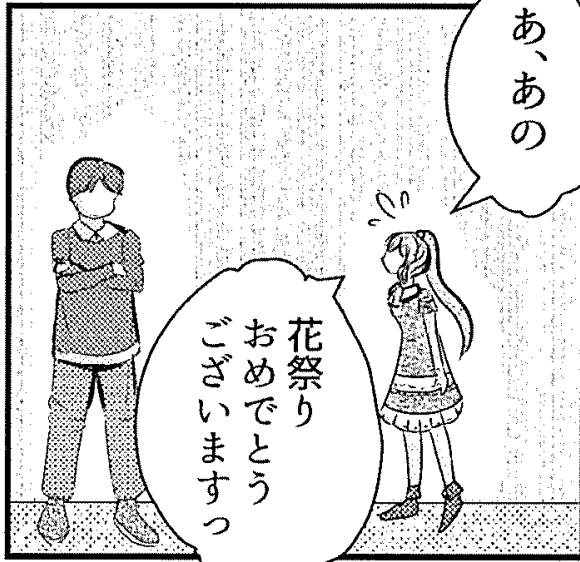
そうね
招待状の受付が
終わったら:

ひよっとしたら
声かけて
もらえるかも♪

ちよっと
近くまで見に行っ
てみようよ!

ねん



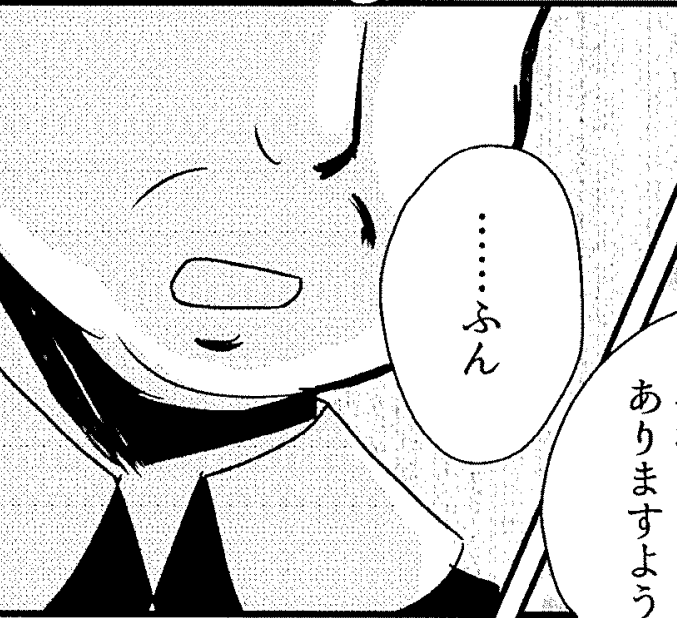


あ、あの

花祭り
おめでとう
ございますっ



ベーカーさん！



……ふん



『今年も
あなたのもとに』

『女神様の
祝福が
ありますように』



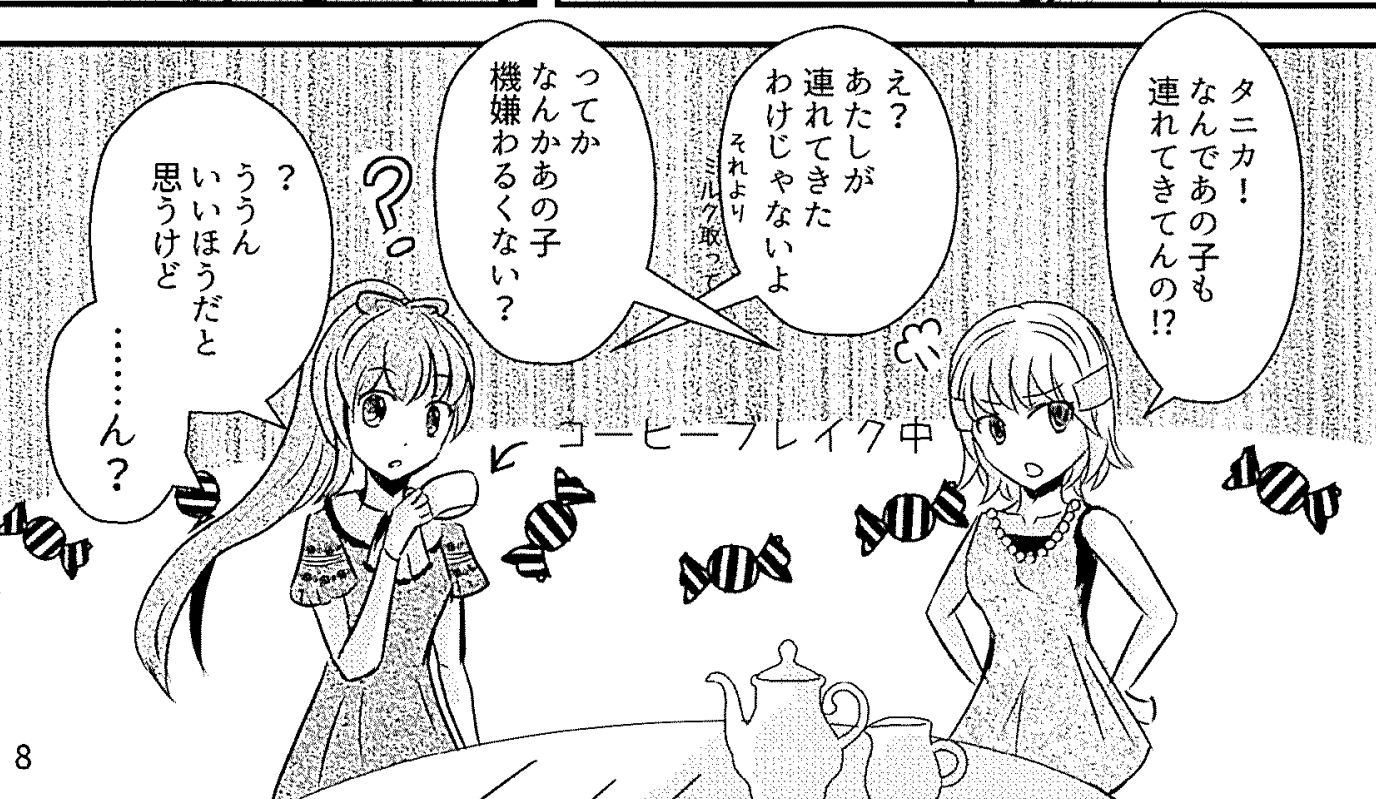
おい



——と、こんな感じで
来年のための
根回しをします！



ラブくんも
花祭り
おめでとう



こんばんは
美しい
レディーたち

春の宵に
美しいドレスが
映えるね

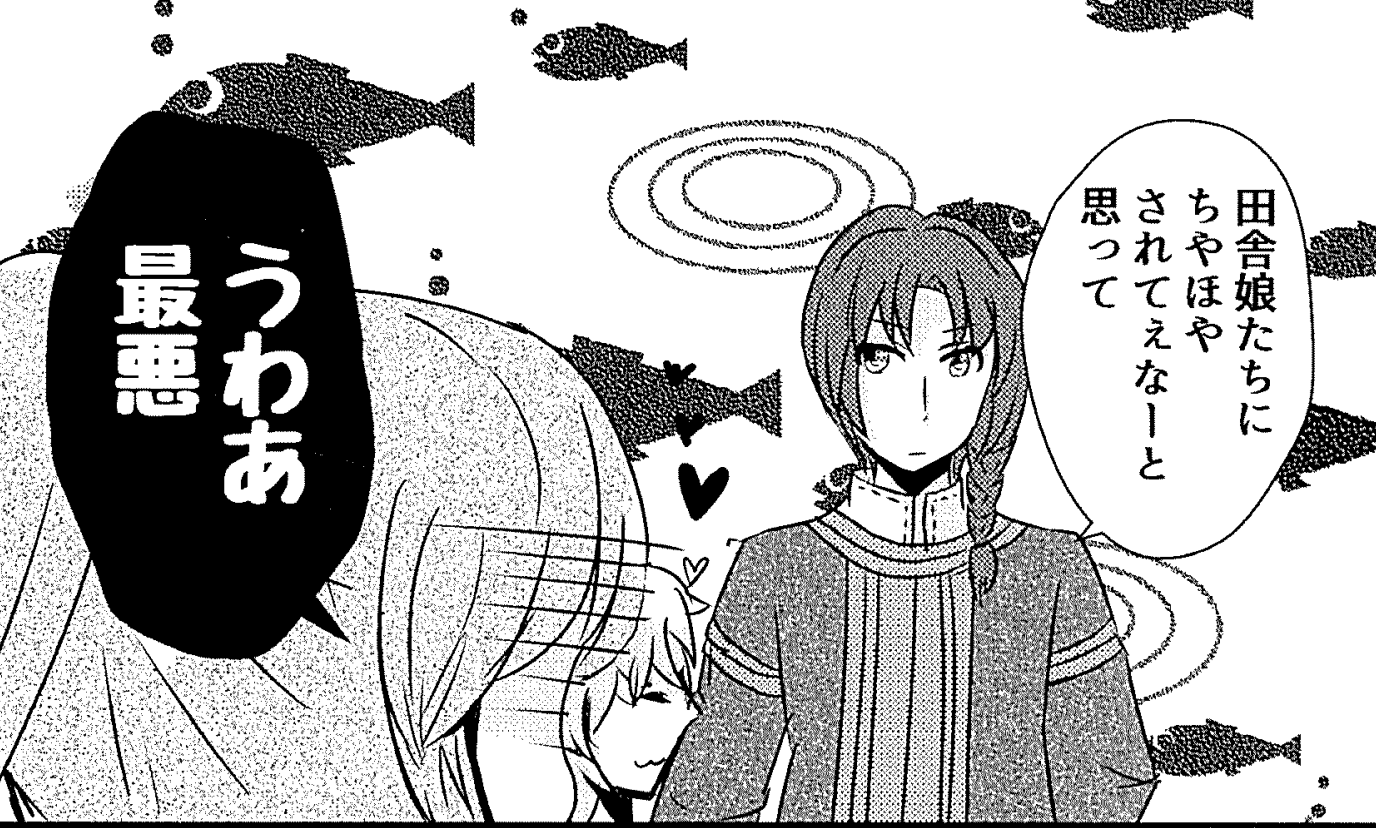
タニカ!
貴族さまかも

いや
違うよ

ラパン、なんで
ここにいろの...?

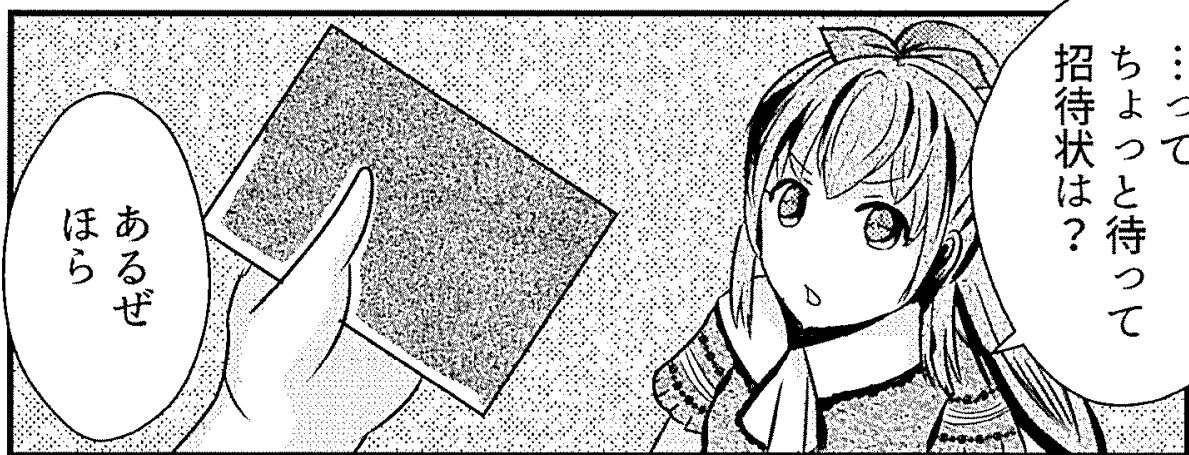
花祭りに
興味があったとか?

いや?
祭り自体はわりと
どうでもいいんだが



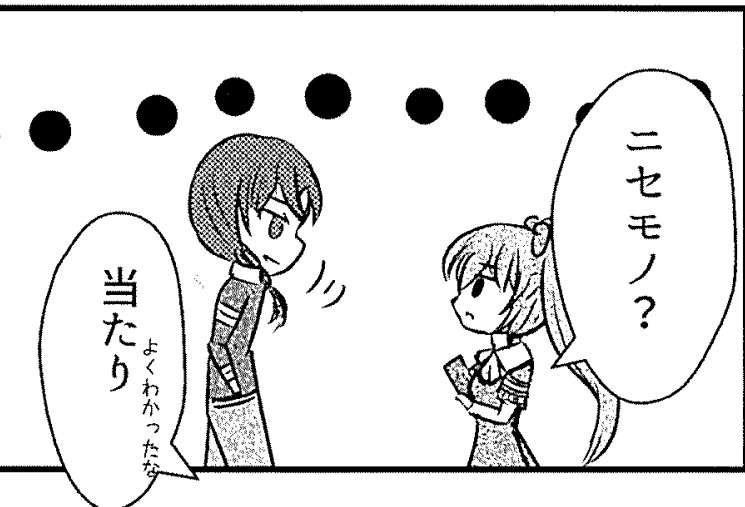
うわあ
最悪

田舎娘たちに
ちやほや
されてえなーと
思っ



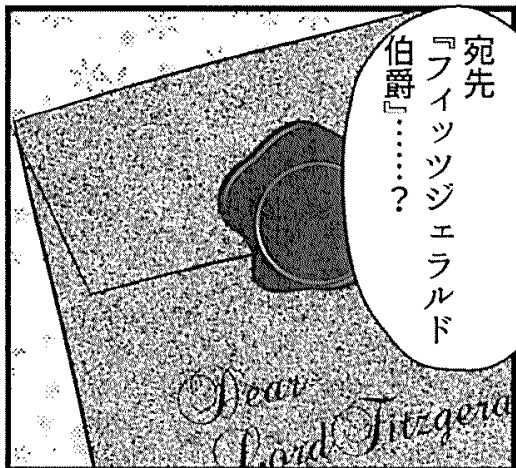
…って
ちよつと待って
招待状は？

あるぜ
ほら



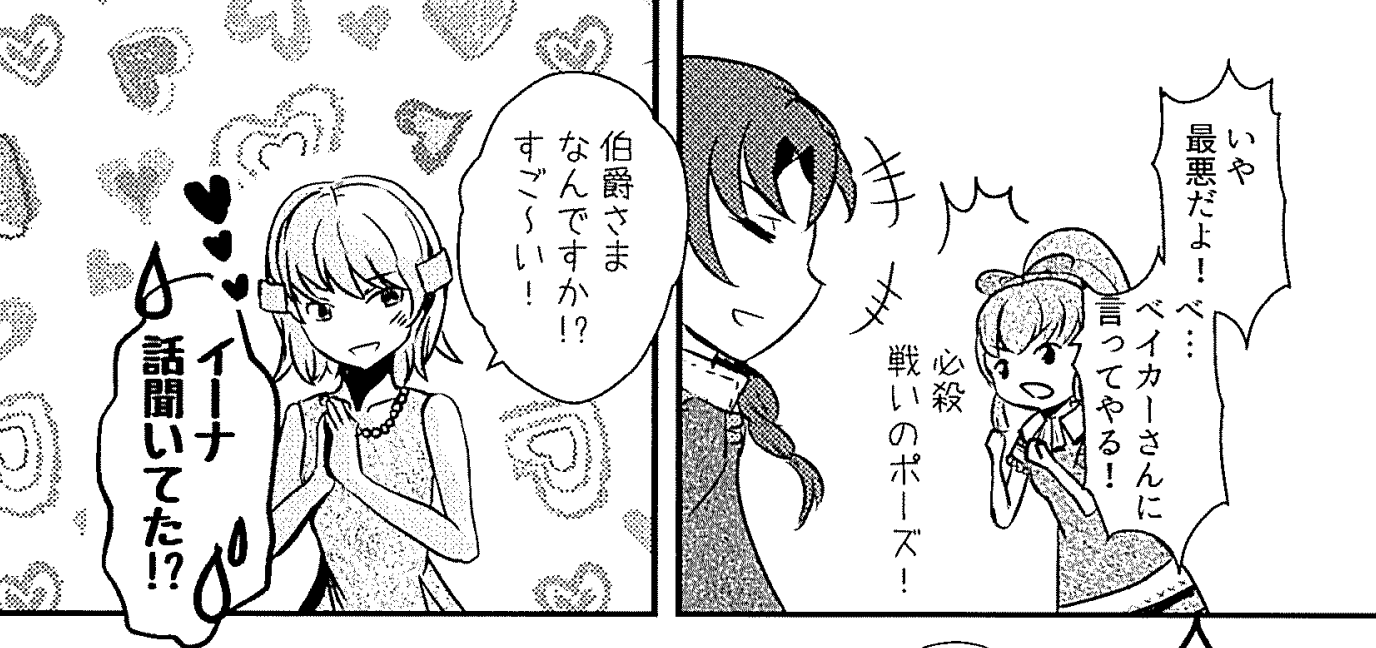
ニセモノ？

当たり前
よくわかったぞ



宛先
『フィッツジェラルド
伯爵』……？

Dear
Lord Fitzgerald



いや
最悪だよ！

ベ…
ベーカーさんに
言ってるや！

必殺
戦いのポーズ！

伯爵さま
なんですか！
すごーい！

イーナ
話聞いてた！



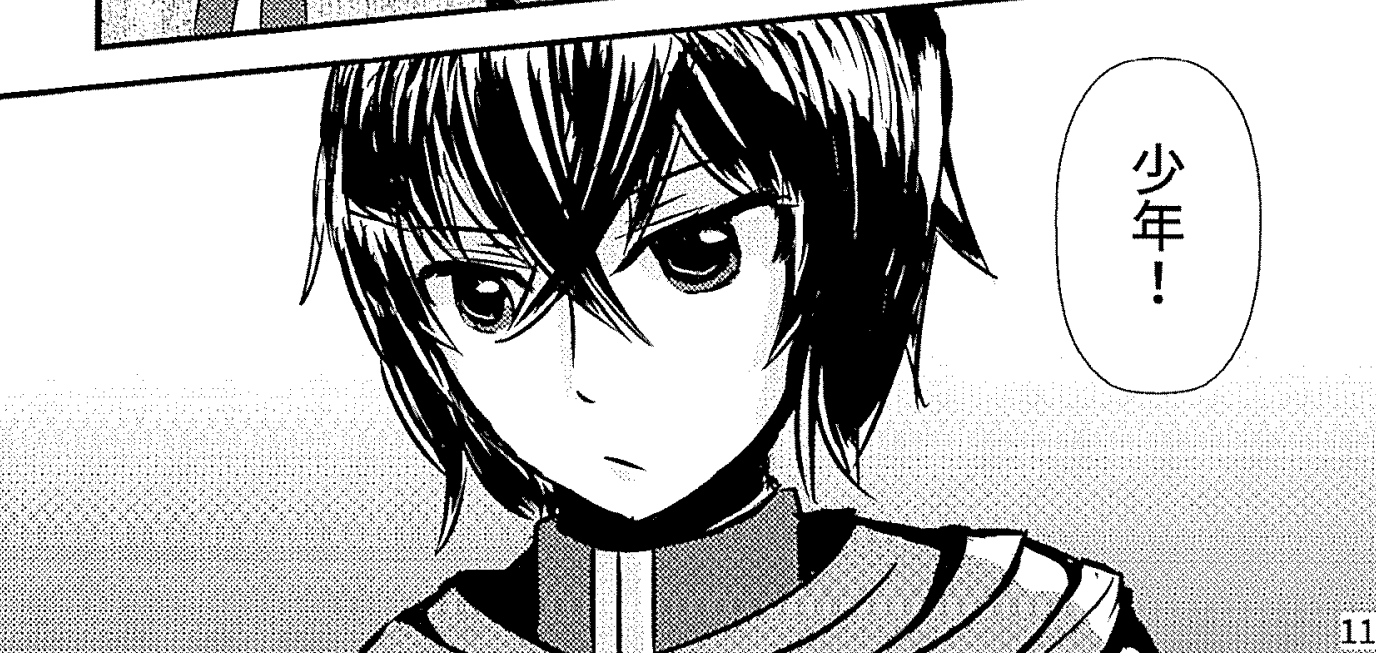
とにかく
力太の子に
近づいちゃ
ダメだから！
アイシヤにも！

まあ
そう邪険に
するなって

せっかく
遊びに来て
やったんだから

お

お
お



少年！

どうしたオイ
意外だな！

おまえは
こういうところ
苦手そうなのにな

……うるさい
時間つぶしなら
他所でやれ

『フィッツジェラルド
伯爵』

まじめに
なにしてたんだ
少年？

あれだ
タニーが
気になるんだろ

……べつに、
ただ来たただけだよ

理由はない

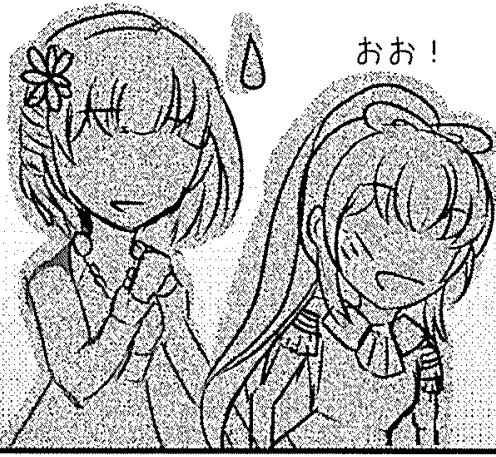
そりゃ
穏やかじゃねーな

……。



タニカ一
貴族さま見にいこー

おお！



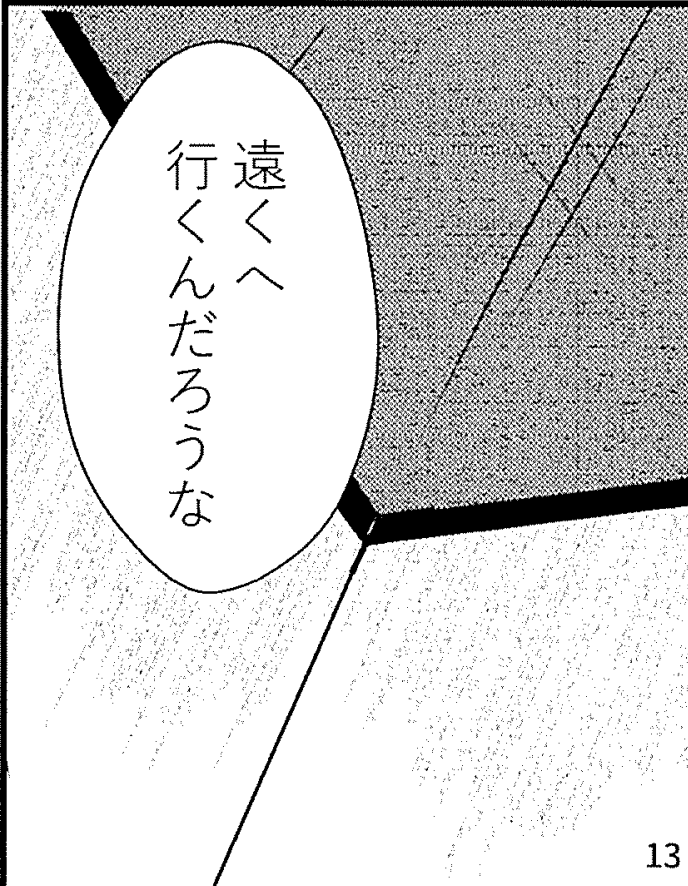
……きみは
いつか

……



は？
誰が？
オレ？

違う
馬鹿かあなたは



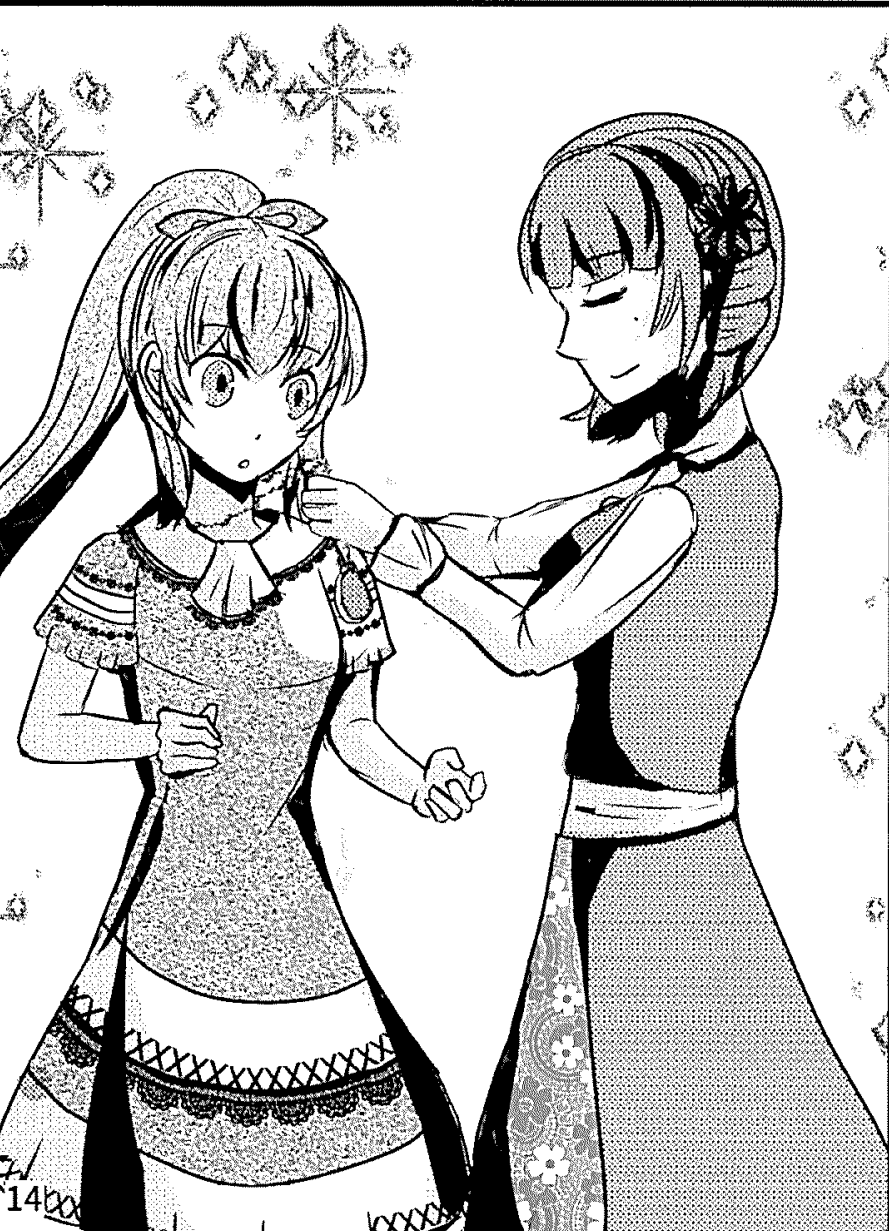
遠くへ
行くんだろうな



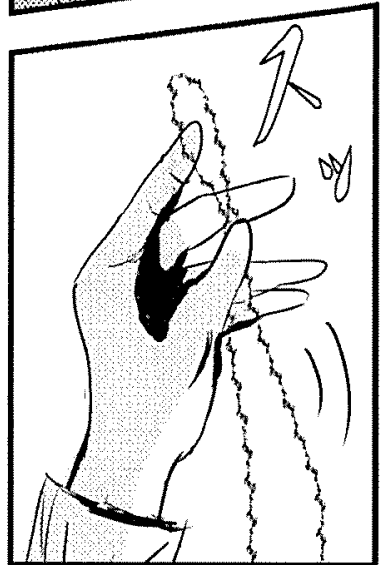
…ちよつと
こつちへ
来て

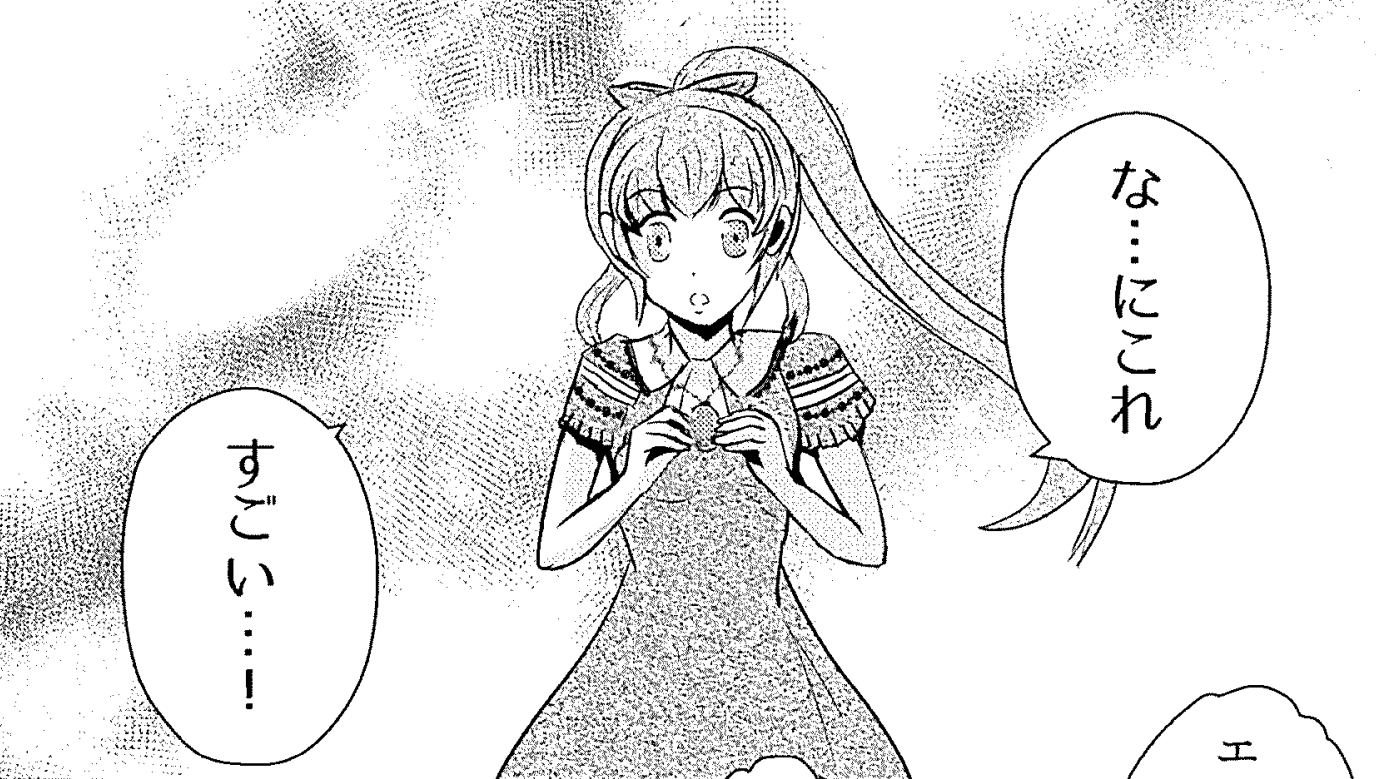


タニカ



なに？





な…にこれ

お返し……



エメラルドよ

このまえ
あなたの誕生日
だったでしょ？
だから

17歳のお祝いに



でも
いいの？

ホントに
あたしに？

だって
こんな
きれいな首飾り

…わたしからじゃ
ないわ

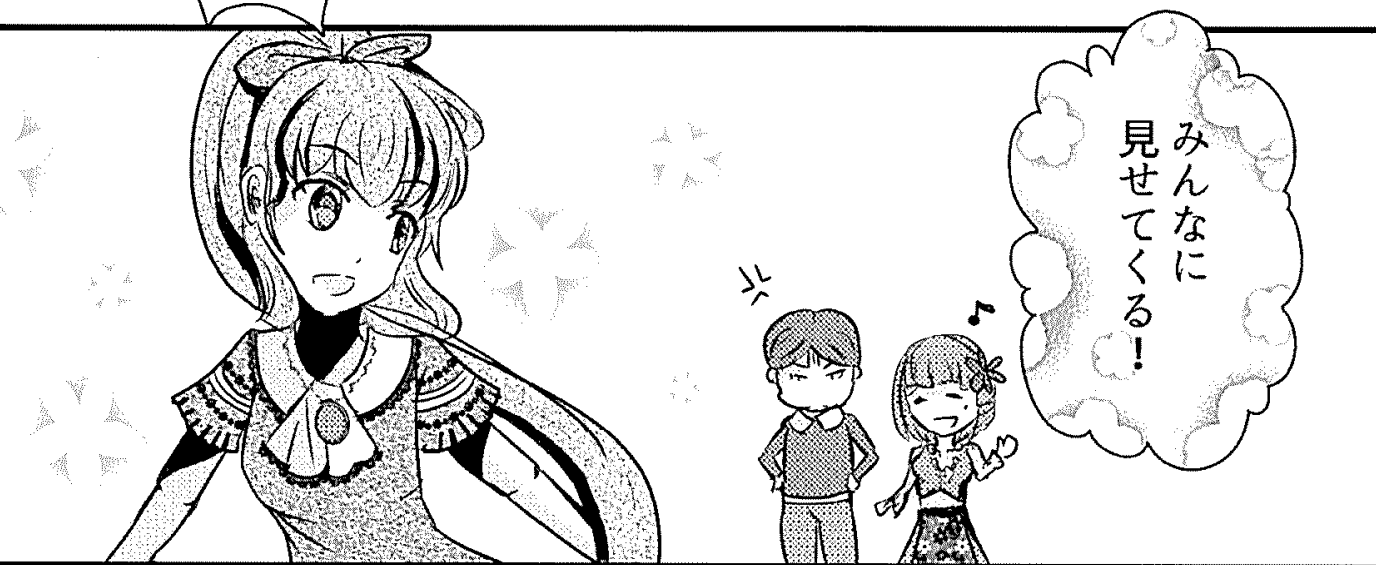
わたしたち
家族の
皆からよ

17歳おめでとう
タニカ

：年頃の娘で
首飾りの一つも
持っていないのは
おまえくらいだ

村の慣習に従うなら、
本来は母親から代々
受け継ぐべきだが

……さうもぐくみ

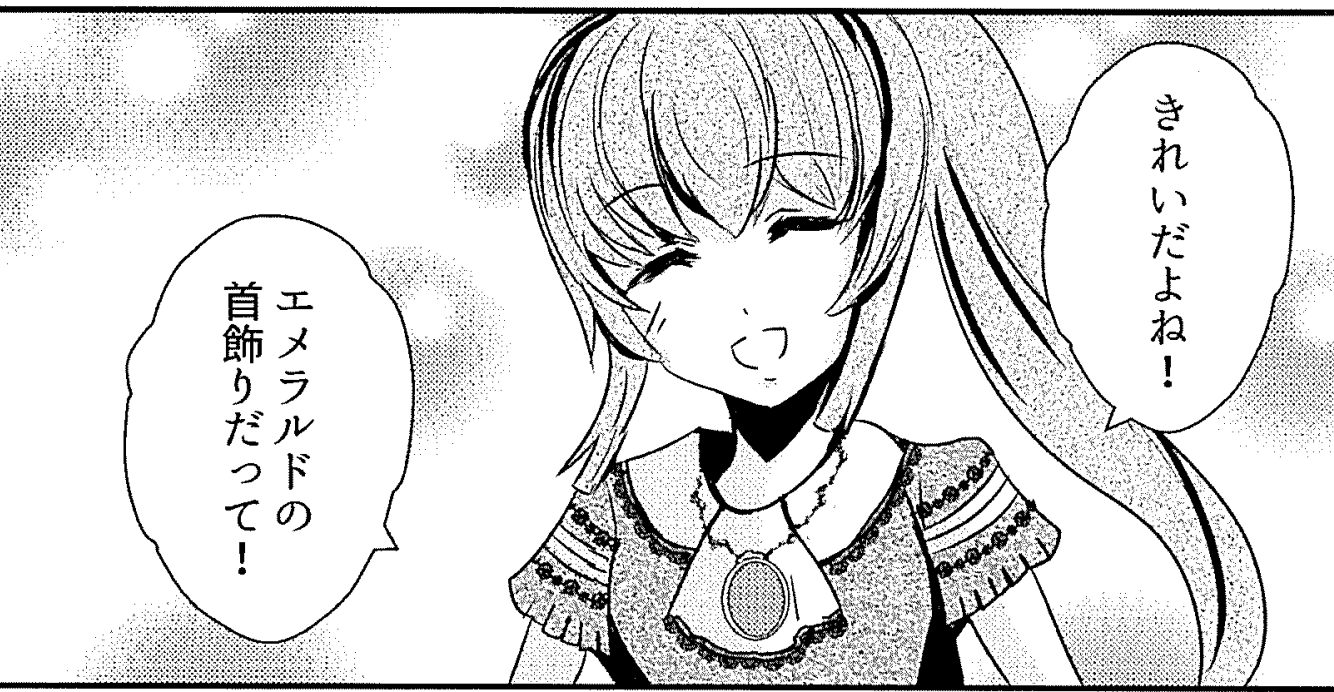




これ
ベイカーさんに
もらったんだ！

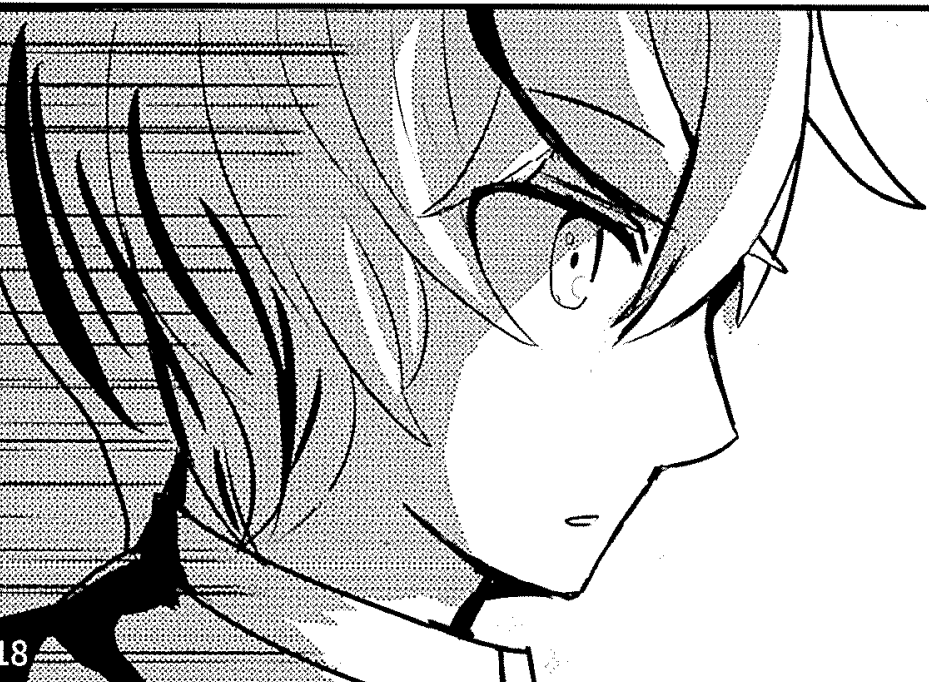


ね
見て！

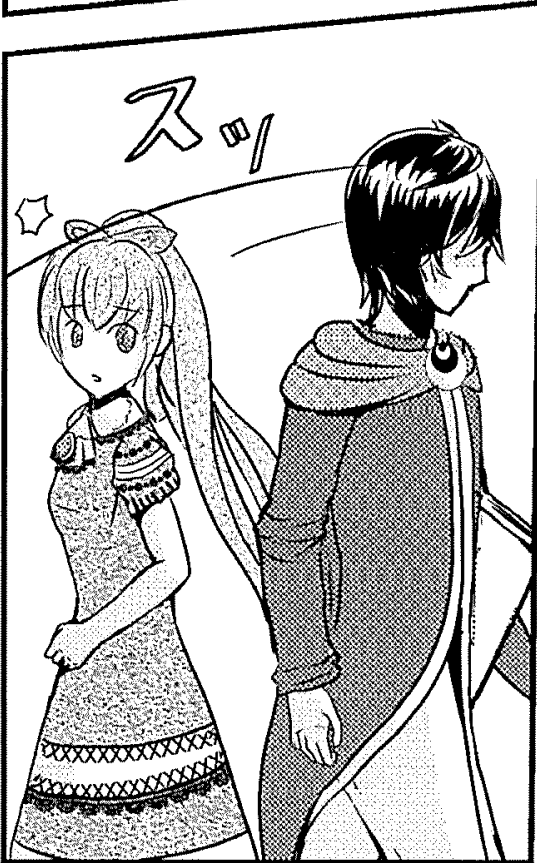
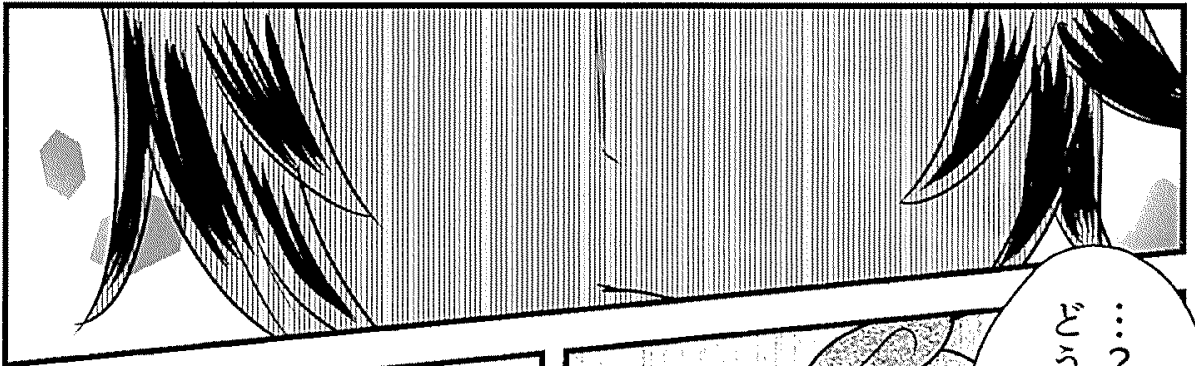
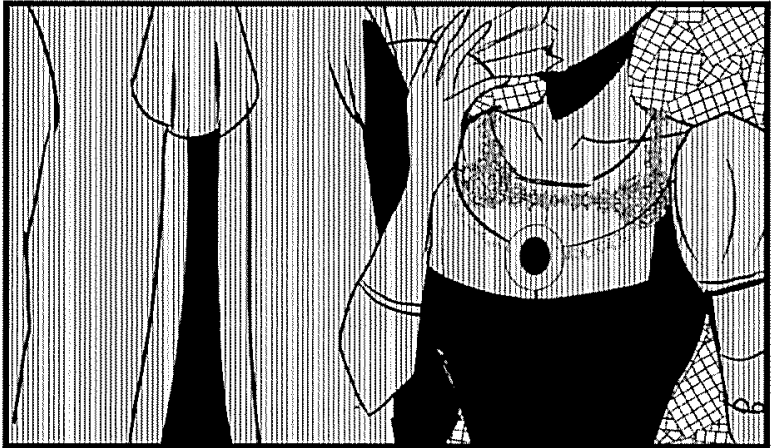
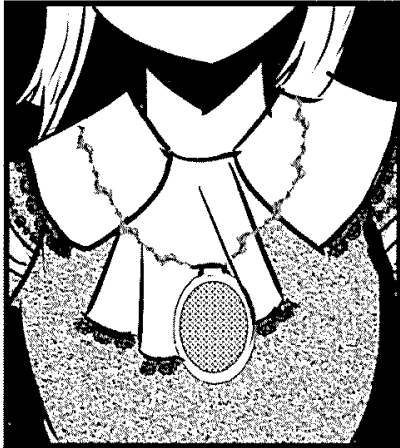


きれいだよね！

エメラルドの
首飾りだって！

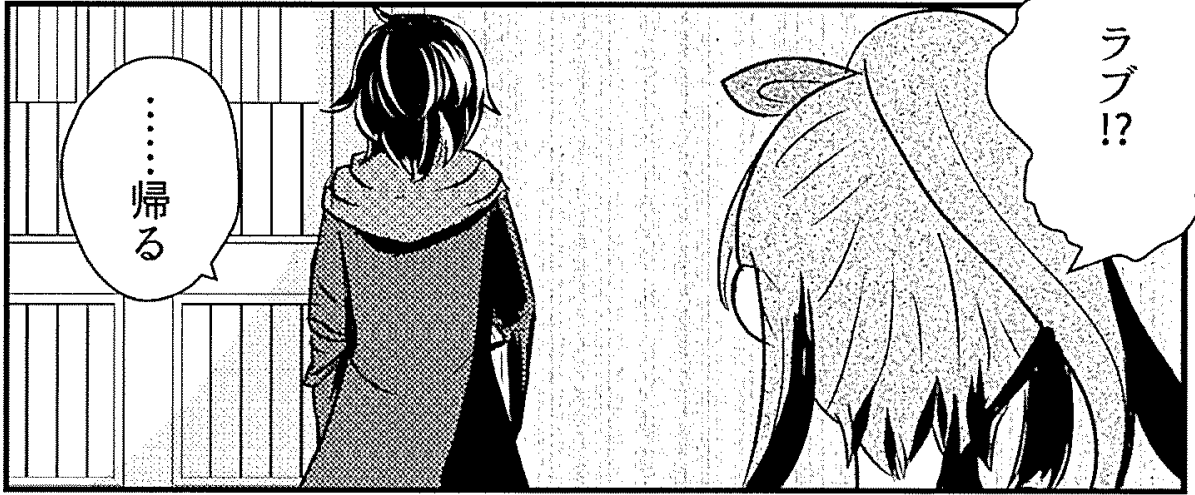


……！



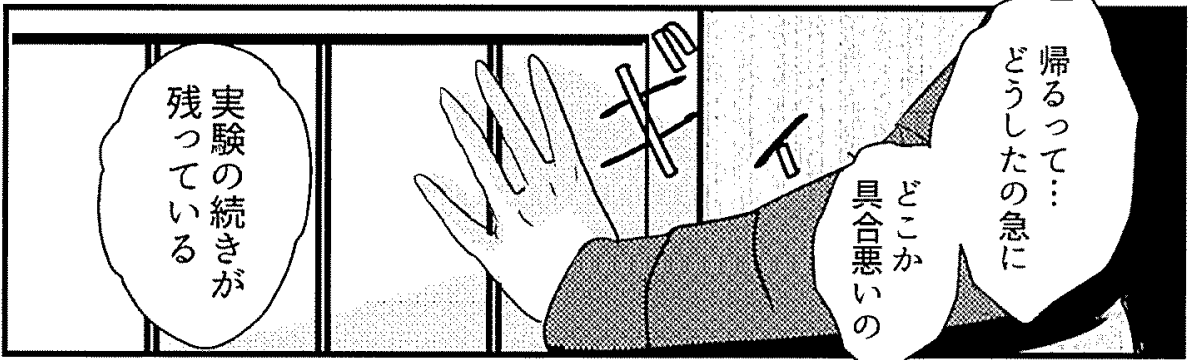
…?
どうしたの？

だいじょうぶ？
なんか顔色が…



……帰る

ラブ!?



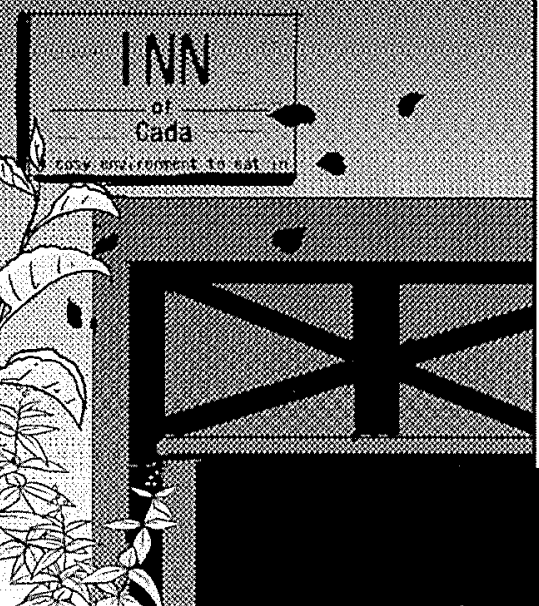
実験の続きが
残っている

帰るって……
どうしたの急に
どこか
具合悪いの



……

でも
その時

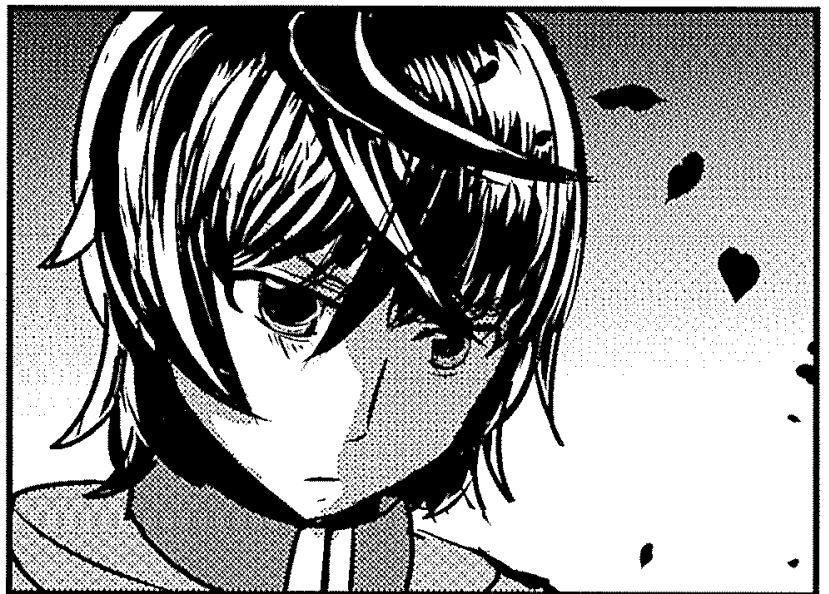
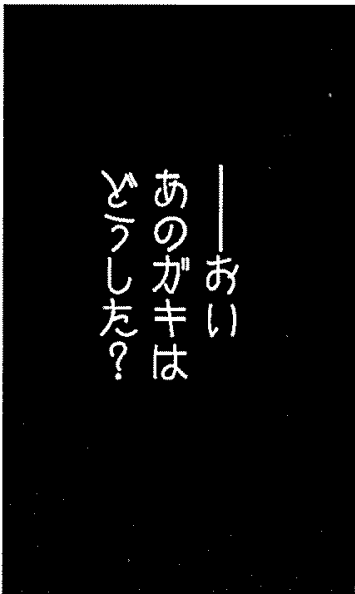
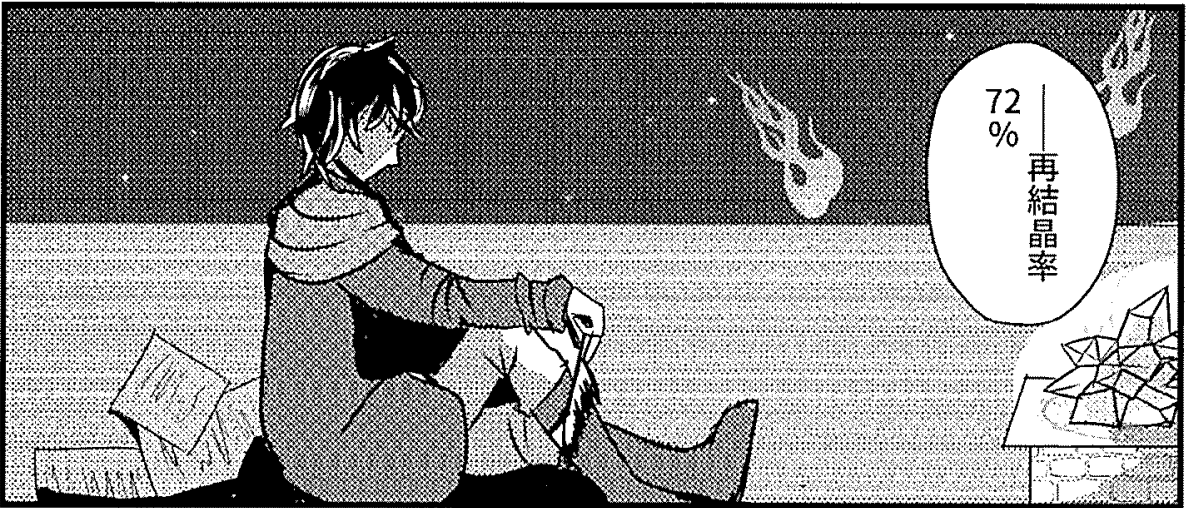
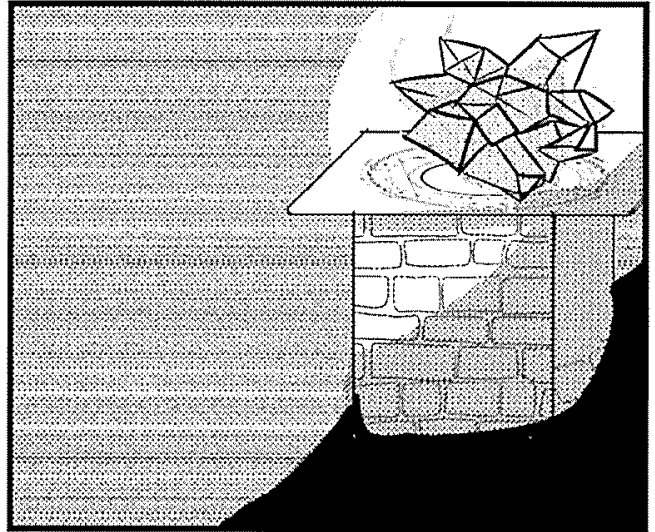


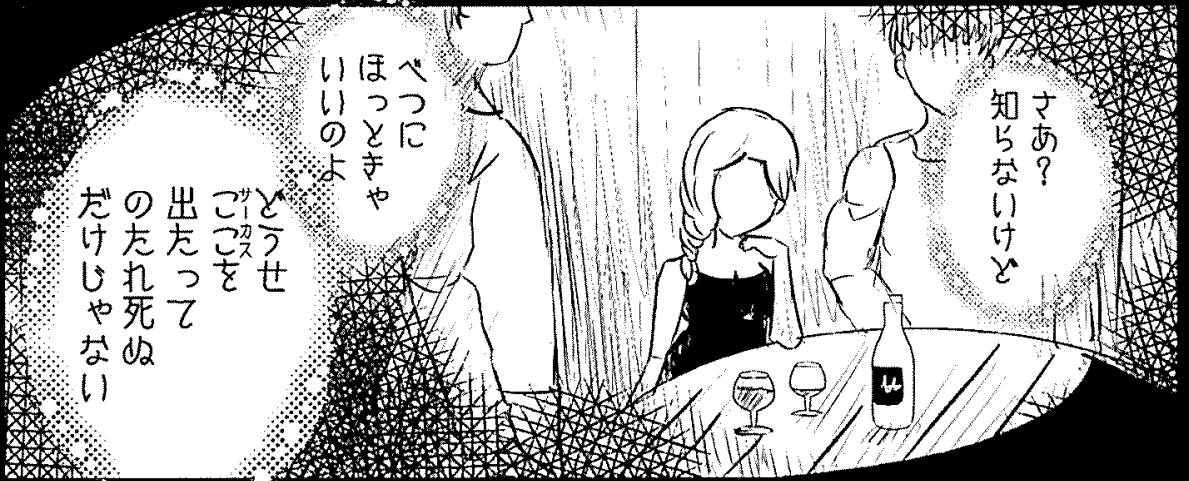
——きみはいつか
遠くへ行くんだらう



僕は

いつたいどこに
いるのだらう





すあ？
知らないけど

べつに
ほっときや
いいのよ

どうせ
ごっこを
出たって
のたれ死ぬ
だけじゃない



——ここは
どこだろう

何年前かに
団長が
その辺で
捨てたんだよ

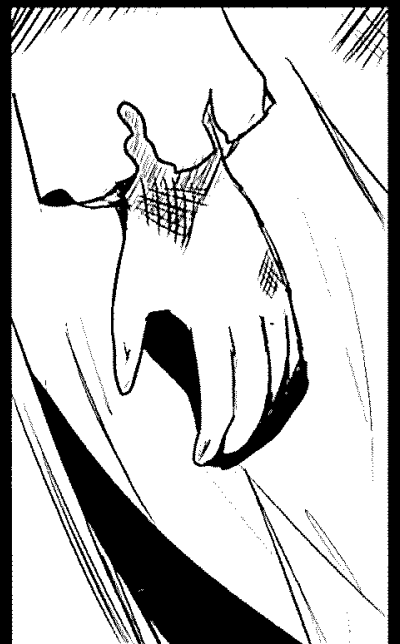
捨て子だって

東国人の
血が混じってるんだと

子供なのに
魔術を使うから

わりといい
見世物に
なるんじゃない
かかって

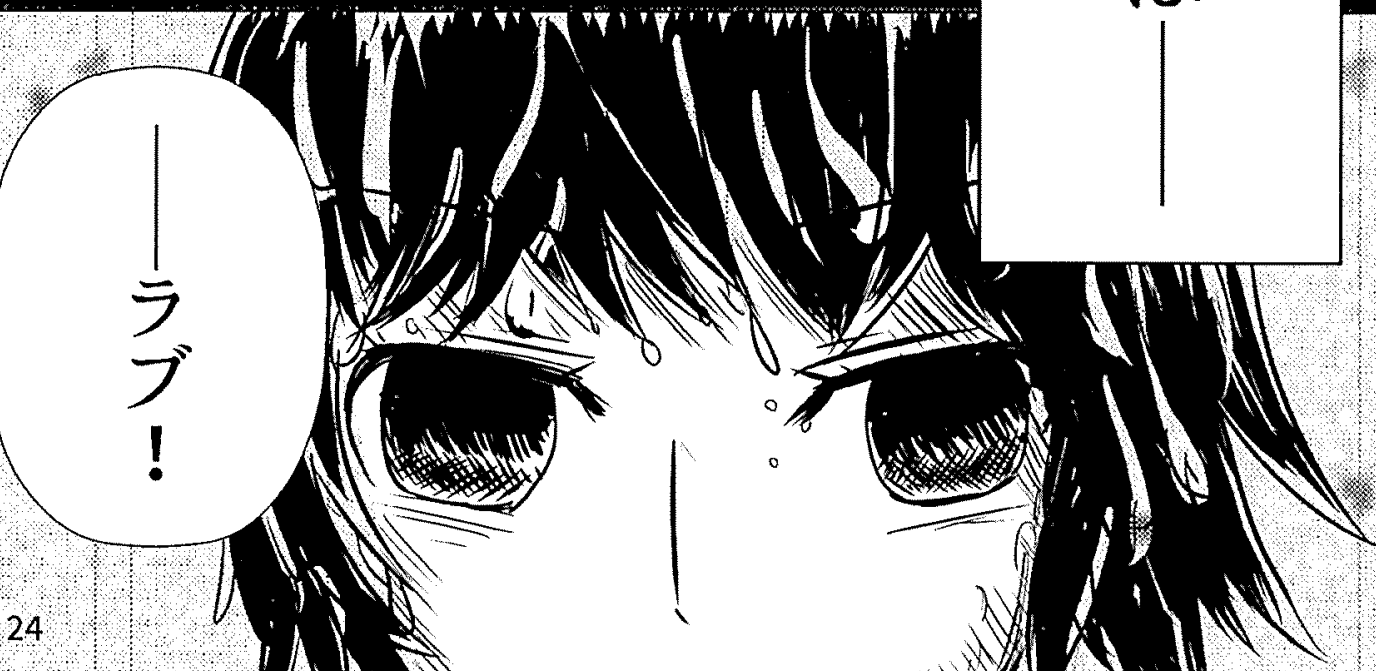
僕は
なぜここに
いるのだろう

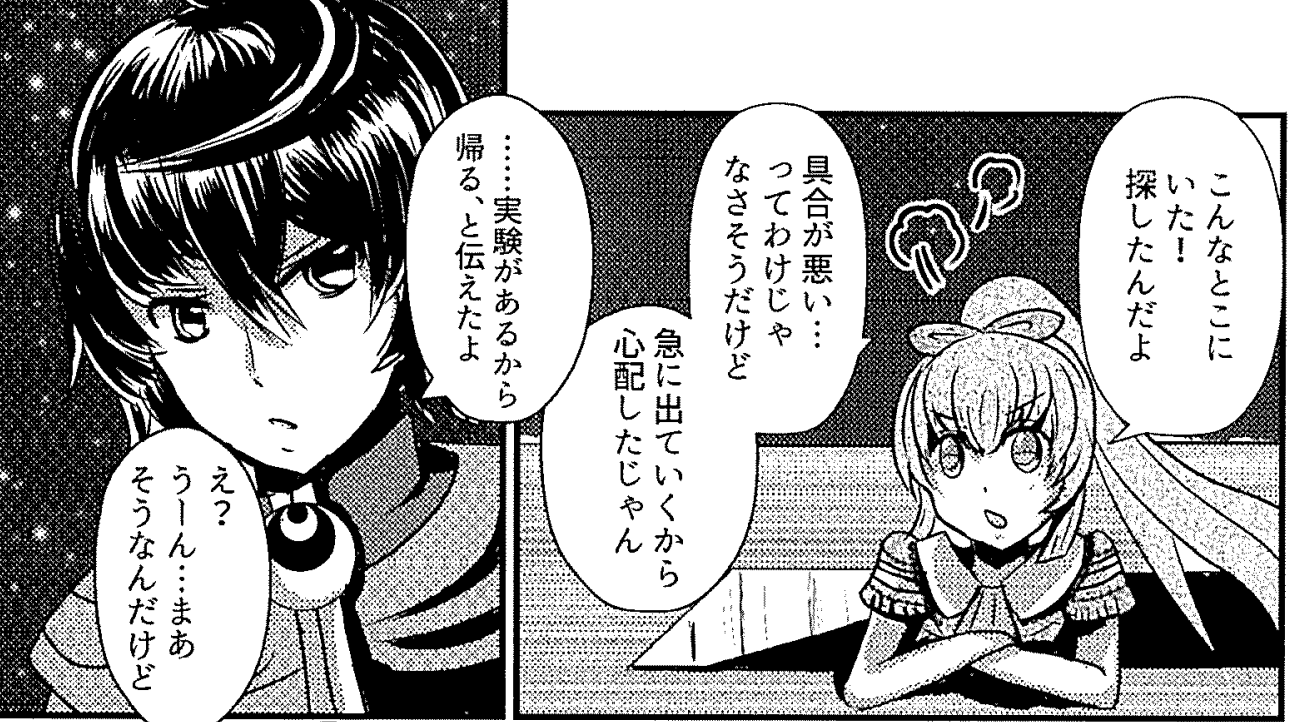




僕
は
—

—
ラブ！





こんなところにいた！探したんだよ

具合が悪い…
ってわけじゃ
なさそうだけど

急に出ていくから
心配したじゃん

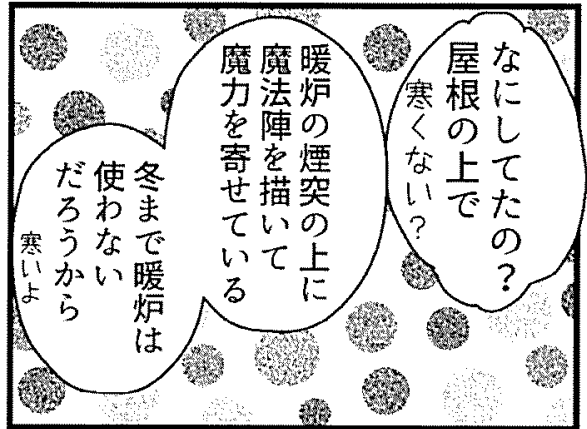
…実験があるから
帰る、と伝えたよ

え？
うーん…まあ
そうなんだけど



なんで
煙突なんか…って

うわ
なにあれ!?



なにしてたの？
屋根の上で
寒くない？

暖炉の煙突の上に
魔法陣を描いて
魔力を寄せている

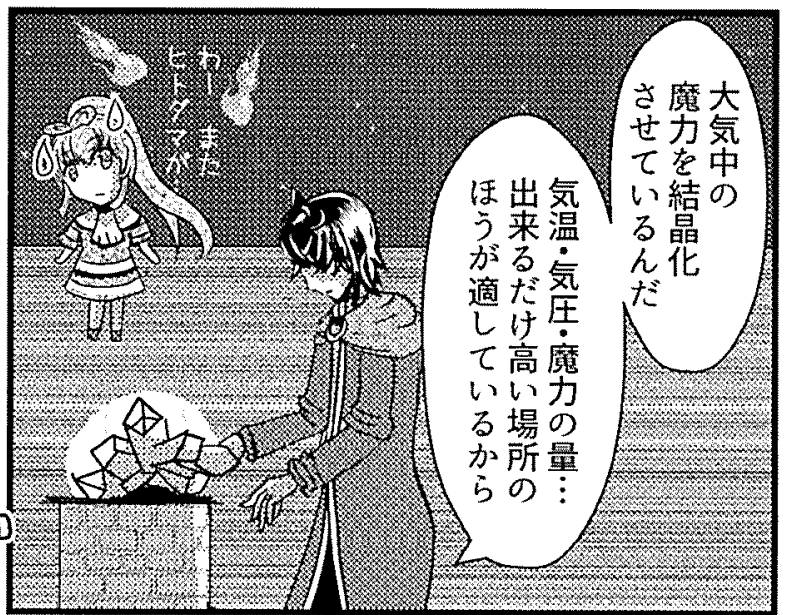
冬まで暖炉は
使わない
だろうから
寒いよ



いのまに

ふーん…？

あんなものか



大気中の
魔力を結晶化
させているんだ

気温・気圧・魔力の量：
出来るだけ高い場所の
ほうが適しているから

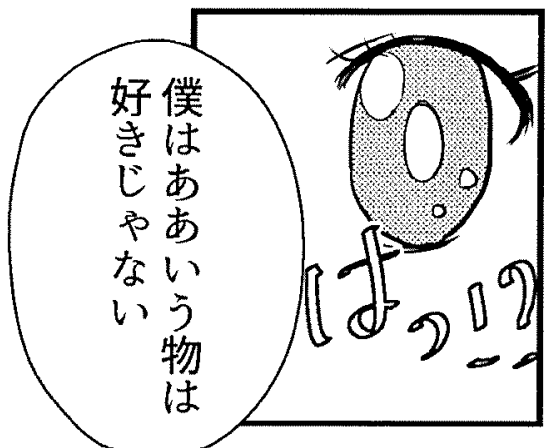
ヒトタテが



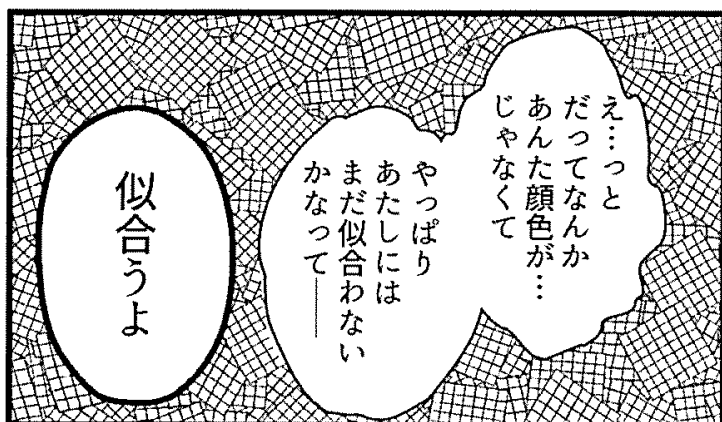
もう
はずしたのか



…さつきの
首飾りは



僕はああいふ物は
好きじゃない



似合うよ

え…っと
だってなんか
あんた顔色が…
じゃなくて
やっぱり
あたしには
まだ似合わない
かなって—



きみの瞳と
同じ色だ



だけど
きみには
似合うと思う

…透明な緑



え

えっなに!?
どうしたの!?
頭どうかした!?

いま変なこと
言ってたよ!
意識ある!?
あ、熱があるの!?

必殺
戦いのポーズ!

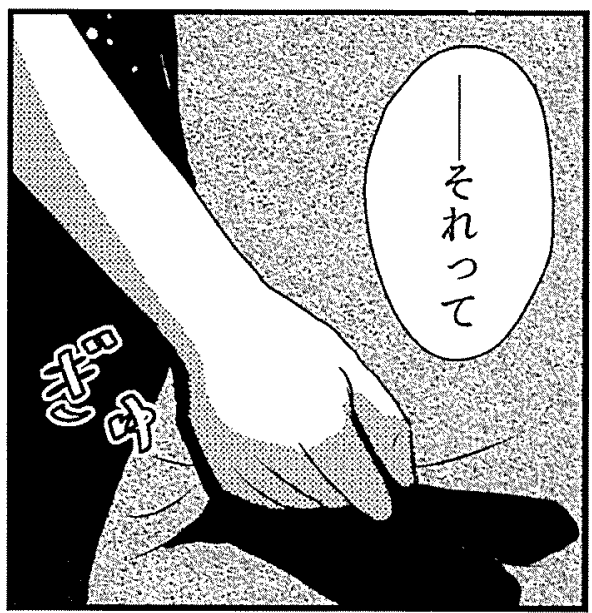
えええええ

えええええ



……だけど
きみが
変わってしまう
気がする

……だから
嫌いだ

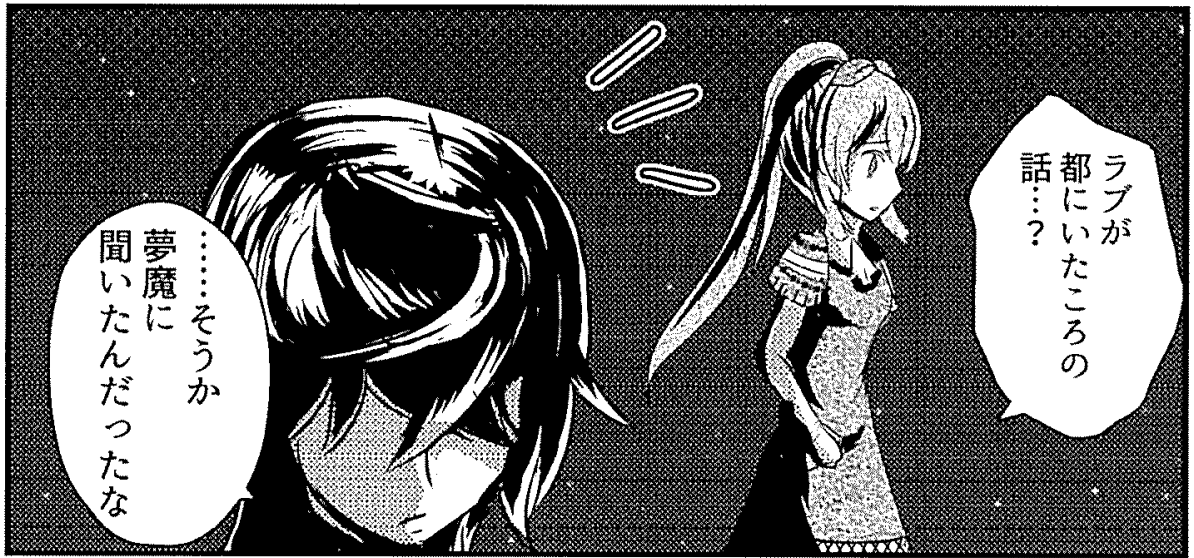


——それって

和
刀



僕を見に来る連中は
ああいう物を
身につけていたから



ラブが
都にいたころの
話…？

……そうか
夢魔に
聞いたんだったな



そっか…

辛かったん
だろうね

いや



辛くはない

どうせ博士の
足元にも及ばない
低俗な連中ばかりだ

ただ
よくわからない
…いや
わからなかった

自分は誰なのか
ここはどこなのか

おあ

——僕は
自分の名前すら
持っていないかったから

人間は誰かから
認識されて
初めて自分を
周囲から区別できる

その為に
名前がある

仮にまったく
誰からも存在を
認識されなければ



…僕も『僕』を
識別できない

…時々
思い出す
ことがある

あの人の声と
雨の音

…それから
もうひとつ

ねえ

あんた
名前は？

僕に
名前を
訊いたのは
きみが
初めてだ





そう…なの？

なんで…

きみは
言葉を発さない
子供に
何かを尋ねようと
思うのか？



…きみは
どうしようもなく
馬鹿だけど

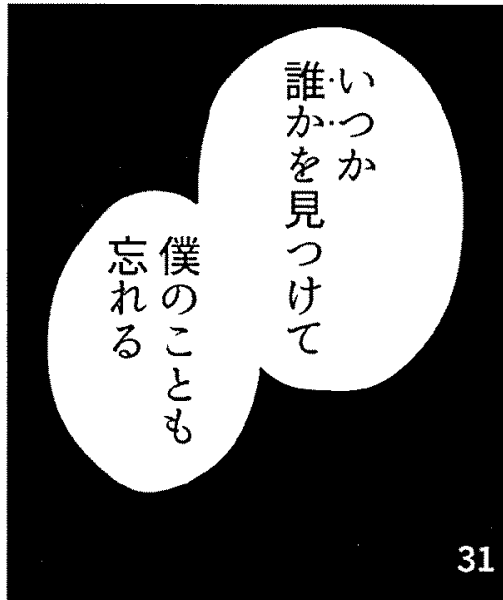
近いうちに変わる
賭けてもいい

時とともに
記憶は薄れて



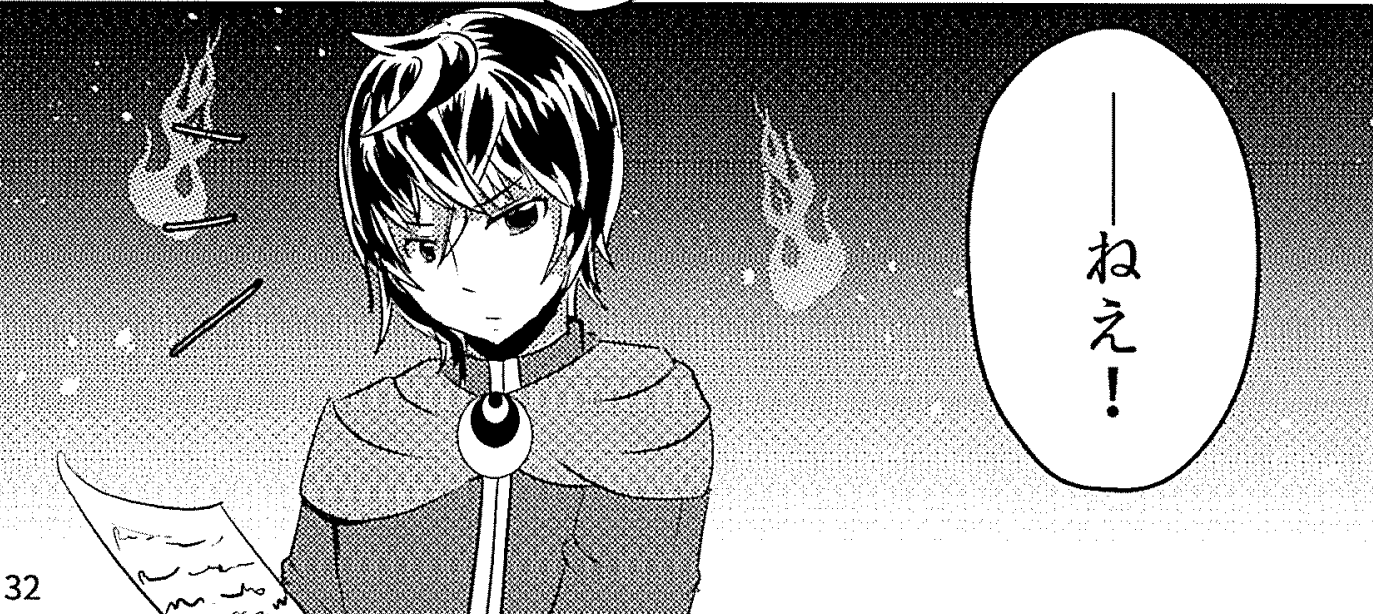
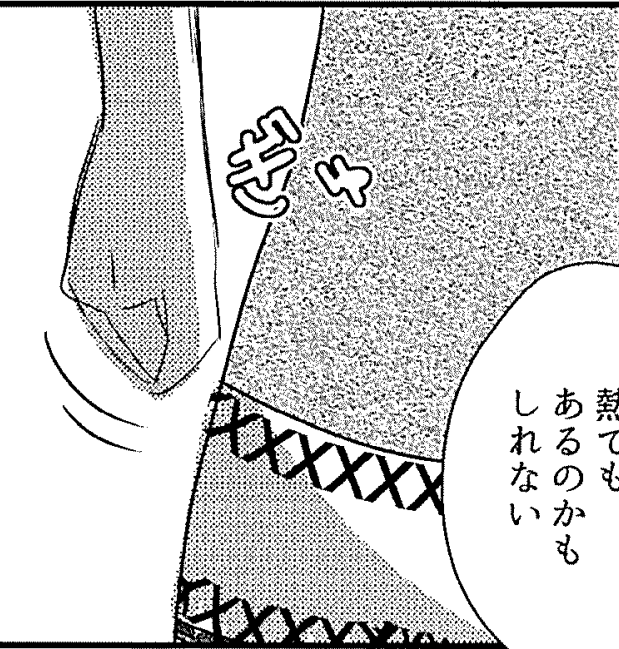
な…にそれ
なんの話？

なんで急に
そんなこと…



いつか
誰かを見つけて

僕のこと
も
忘れる





あたしの首に
かけてみて!



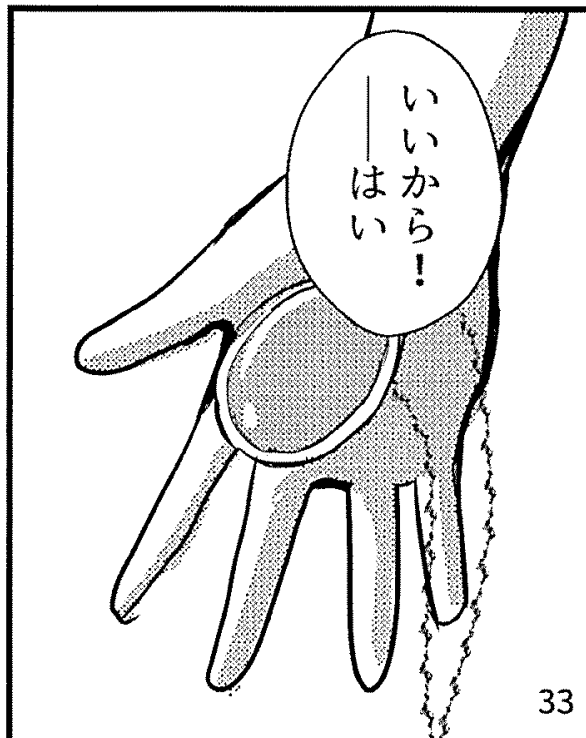
...これ!



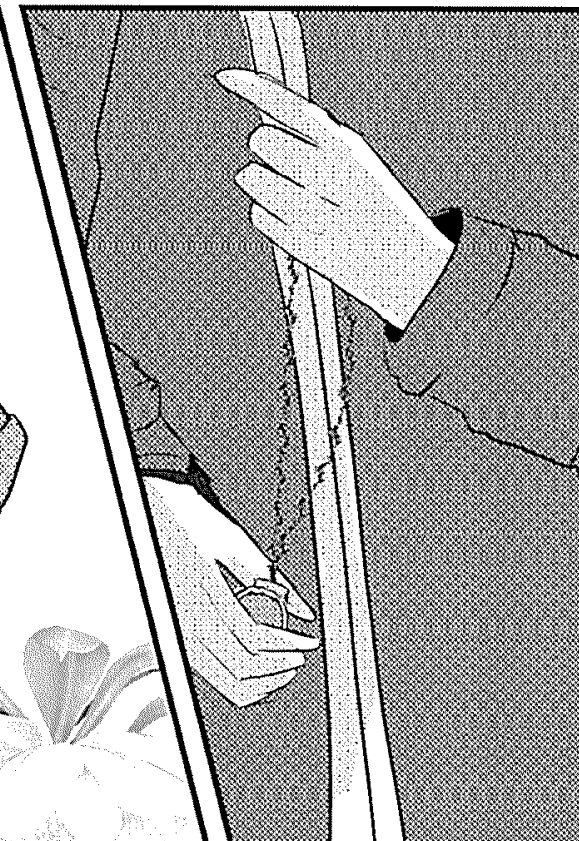
は?



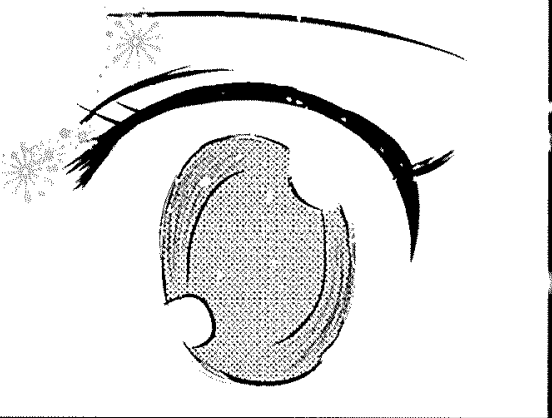
.....



いいから!
はい



…うん



ね 見て！

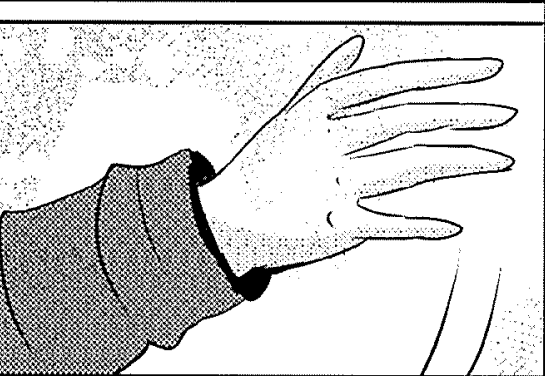
なんにも
変わらなかつたよ

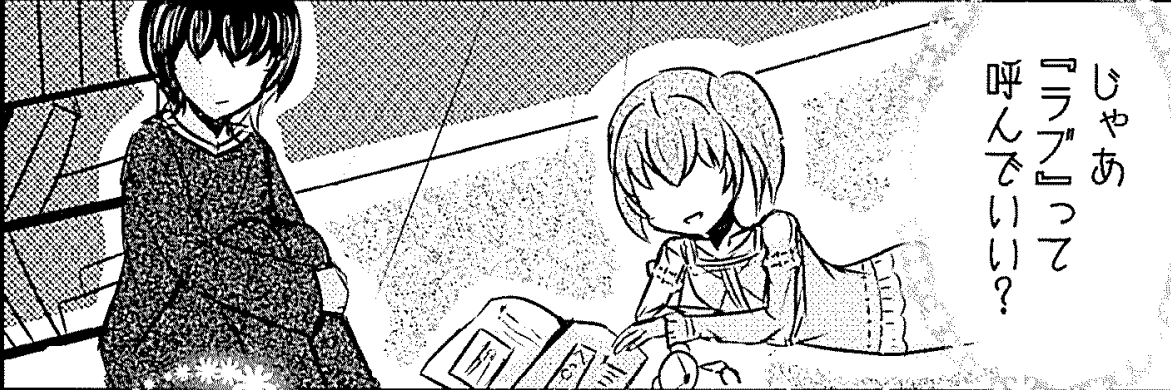


…
当たり前だろ
そんなの




…






じゃあ
『ラブ』って
呼んでいい？



だって
おとうさんに
魔術を
ならうんでしょ？



すごい魔術師に
なるんだよね！

ってことは
あんたもいつか
この絵本の
女王さま
みたいに

—— 僕が
博士のような
魔術師になったら

きみは
僕のそばに
いてくれるの
だろうか

博士の代わりでも
なんでもいい

僕が
きみを守るから



だから
あと少し

——できるだけ
少しでも長く

きみのそばに
いさせてほしい

おわり。

Fin.